

松村一男著

『神話学講義』

(角川選書 5、角川書店 一九九九年)

中西恭子

本書は、近現代神話学史の成立と展開を歴史的・思想的背景と併せて描く試みである。浮き世離れして捉えどころのないものにも見える「神話学」の実態は余り一般には知られていないし、一般的に歴史的・思想的背景と切り離されて論じられがちな「学説史」のダイナミズムをこうした背景のなかに位置づけて明らかにする試みは少ない。その点で本書は画期的な「神話学史」概説である。

著者は一九五三年生まれ。神話学と宗教学を専門とする。東京大学人文科学研究科宗教学宗教学専攻博士課程単位取得退学後、天理大学で教授を務め、一九九九年より和光大学教授として神話学を講じる。あとがきによれば、本書は天理大

学・大阪大学・筑波大学における学部学生向けの「神話学」の講義内容を中心に構想されたものである。

本書では、近代神話学の開祖たるマックス・ミュラーから、ジェイムス・フレイザー、ジョルジュ・デュメジル、クロード・レヴィ・ストロース、ミルチア・エリアーデ、ジョゼフ・キャンベルにいたる六名の近現代神話学史を代表する（と著者が考える）神話学者たちの学説が、ライフヒストリーと社会的思想的背景とともに紹介される。比較文化研究同様に、神話学も宗教学も、その成立過程からいって根本的に「比較」の手法を重視する分野である。その成果は思想性・政治性と深い関連をもつものであり、芸術も含めた隣接諸分野や社会

への影響力には少なからぬものがある。本書では、宗教学と神話学の接点から神話学史が紹介されており、学説が本質的に免れえない時代的制約と思想性と政治性のありようが的確に描き出される。このアプローチは比較文学研究・比較文化研究の方法論と学説史研究の方法論を模索する上でも示唆的である。

本書の構成は次の通りである。

まえがき

第一章 神話学説史の試み

第二章 十九世紀型神話学と比較言語学

第三章 マックス・ミュラーと比較神話学の誕生

第四章 フレイザーと『金枝篇』

第五章 デュメジルと「新比較神話学」

第六章 レヴィ・ストロースと「神話の構造」

第七章 レヴィ・ストロースと「神話論」

第八章 エリアーデと「歴史の恐怖」

第九章 キャンベルと「神話の力」

おわりに

巻末にはあとがきのほか、邦語文献を中心に文献案内が付されている。

まず、本書の概略を示そう。

「まえがき」と第一章では、「神話」の定義と本書での「神話学史」の分析軸が提示される。

神話学は、神話を研究の対象とする隣接諸科学との密接な関係の中に育ってきた。また、神話観は、神話研究者の間だけでなく極めて多様である。昨今では、神話学者自身が「神話」という概念自体が実体のない幻想である（ストレンスキー）との見解を提唱する事例もあり、「神話」の定義そのものが困難となっている。こうした事情をふまえて著者が仮説的に提唱する「神話」の定義とは、「個人ではなく集団が神聖視する物語であり、作者は問題とならず、成立した年代は不明ゆえ、太古に生じたとされるもの」である。

本書の叙述の基礎的な枠組みとして著者が提唱する仮説は、十九世紀末から二十世紀初頭に生じた「世俗化」と「学問の世界でのキリスト教的西洋の絶対的優位性の動揺」が神話学にも「パラダイムシフト」をもたらした結果、近現代の神話学説は「十九世紀型神話学」と「二十世紀型神話学」に二分して論じうる、というものである。ここでいう「十九世紀型神話学」とはマックス・ミュラーやフレイザーのような、進化論と歴史主義に依拠して神話を論じ、神話を過去の遺物とみなす立場である。一方で「二十世紀型神話学」とは、レヴィ・ストロース、エリアーデ、キャンベルのような、構造主

義的あるいは反歴史主義的な見地から普遍的な心のメカニズム・無意識を神話の基礎に想定する立場である。デュメジルは両者の過渡形態として論じられる。

以下の各章では、神話学者たちの学説が「十九世紀型」あるいは「二十世紀型」に分類されながら、歴史的・思想史的背景とともに紹介される。

第二章から第四章までは「十九世紀型神話学」の事例が紹介される。

第二章で扱われる比較言語学は、帝国主義の時代を背景として発達した分野で、方法論には歴史主義的傾向を強く、「十九世紀型神話学」の祖型となった。比較言語学では、ヨーロッパの文化的源流である「インド・ヨーロッパ語族」の起源が言語の比較研究を通して探究された。その分析の視角には「インド・ヨーロッパ語族」の文化的優越性という時代的偏見が如実に表れており、ヨーロッパ中心的な人種差別思想にも大きな影響を与えた。

第三章では、近現代神話学の創始者、マックス・ミュラーの「自然神話学」とその学派が紹介される。比較言語学の手法と進化論に影響を受けたミュラーは、「天上の自然現象に対する原始人類の驚き」を起源とする人類最古の神話の再建に関心を寄せ、神話を天体現象のアレゴリーとして説明し、伝説・民話を神話の墮落形態とする。この立場は、古代ギリシ

ア文明を精神的故郷とする十九世紀後半の英国文化のモラルと抵触する神話伝説の存在を矛盾なく説明して一世を風靡したが、ロマン主義を背景とした民族文化発見の潮流のもとでの考古学・民族学・人類学の興隆とともに説得力を失う。

第四章では、フレイザーとその学派が紹介される。進化論と人類学に依拠するフレイザーは、人間の進化の過程を呪術・宗教・科学の三段階からなるものとして捉えた。その理論で特に重要なのは、感染呪術理論を論じた『金枝篇』で扱われた「王殺し」の儀礼と「死んで甦る神々」の神話をめぐる議論である。すなわち王権の死と再生を意味する「王殺し」の儀礼は文化の古層をなす「呪術」段階に普遍的に存在し、自然の死と再生と結びつく「死んで甦る神々」の神話から説明可能である、という議論である。フレイザーはこの見地から「死んで甦る神々」の神話の比較研究を行い、現代の「支配的な宗教」たるキリスト教の古層にも介在する「呪術」段階の神話を示唆して、芸術にも多大な靈感を与えた。

第五章では、「十九世紀型神話学」から「二十世紀型神話学」の過渡形態にあるデュメジルの説が紹介される。デュメジルは構造言語学とフランス社会人類学に依拠してインド・ヨーロッパ語族の神話の比較研究を行い、理想化された社会システムないしは理想化された社会イデオロギーの反映として解釈されうる体系を神話が持つことを指摘した。ここで彼が具

体的に指摘したものは、インド・ヨーロッパ語族の社会階層・神話・儀礼に関する世界観に共通してみられる「祭司・戦士・牧畜農耕者」の役割分担（「三機能体系」説）という現象である。彼の理論は、過去の遺産として神話を捉える点が「十九世紀的」だが、社会システムないしはイデオロギーに着眼した点で「二十世紀的」である。

第六章以降では、「二十世紀型神話学」の例が扱われる。

第六章・第七章で紹介されるレヴィ・ストロースも、構造言語学と人類学に依拠して「無意識の体系」の解明をはかり、主に南北アメリカをフィールドに無文字社会の神話の比較研究を行った。多様な神話の間には、矛盾と対立をはらむ多様な構成要素が存在するが、彼はそれらの相互関係の分析を通して、一見無関係で非論理的に見える神話の構造にも明確な論理体系が存在することを明らかにした。彼の理論では、具体的な事物そのものの体験に生の意義を見出す「神話中心社会」の生氣あふれる論理性が重んじられており、神話を生み出す理性的論理的な思惟では分析不可能な側面に生じる「感情の解放」の要素を担うものとして、儀礼も注目される。

第八章で扱われる宗教学者エリアーデの理論には、その祖國ルーマニアの激動の歴史の影響が色濃い。また、彼の議論の背景には、世界の始源から終末と救済へ直線的に向かう世界像をもつユダヤ・キリスト教的な宗教観への反撥と、周期

的に行われ宗教的な生の空間を不断に再生する機能をもつ神話に由来する儀礼を背景にした非歴史的で循環的な世界像をもつ「アルカイックな」宗教への共感がある。「人間は本質的に聖なるものを志向する宗教的な存在である」として世界各地の神話を幅広く比較検討した彼の理論での「神話」とは、歴史的な現実の中に生きる限り人間存在が免れ得ない不安（歴史への恐怖）を解消し、人間存在を「宗教的」な空間の中に位置づけて時間的・空間的な存在意義を明確にするものである。それゆえ、彼は起源神話を重視する。エリアーデは神話を過去の遺産として論じているようにも見えながら、神話の存在意義を生る意義と結びつけて論じており、世俗化された現代では人々の精神の支柱たる芸術や教育といったものが「神話と神話に基づく儀礼」の役割を果たすことを指摘し、神話を「古代」特有のものではないと論じる。この点が、エリアーデ理論の斬新さでもある。

第九章で扱われるキャンベルの理論は、以上の研究者の理論に比べると明らかに通俗的である。彼は世界中の神話の比較研究に基づいて、「生きる力を与える」英雄神話の重要性を強調しつつ精神分析理論と壮大な文明史観の視点に立って神話を論じ、様々な神話の中には同一の英雄神話の原型である「原質神話」が存在する、と主張しており、この壮大な神話像に影響を受ける芸術家も少なくない。しかし、彼の理論は極

めて恣意的な神話解釈に基づくものであり、厳密な反証可能性を備えた「正統的な神話学の成果」とはいいがたい側面をもつ。また、北米先住民の伝説やアサー王伝説への関心、「神話的テクスト作家」ジェイムズ・ジョイスに対する賛美、英雄神話の重視と理想主義的な神話解釈の背景にある「アメリカン・ドリーム」への素朴な礼賛といった側面には、彼の「アイルランド系アメリカ人」としてのアイデンティティが明白に表れており、時としてその理論を皮相なものに見せる。

「おわりに」では総括と展望が行われる。

本書で検討された神話学者たちの問題関心は一貫して神話の基本的構造の解明にあるが、神話理論形成の際に採用された分析軸は、「進化論と歴史主義」から「構造主義と無意識」へ移行した。また、「西洋近代人」であるこれらの研究者たちの「神話」への関心は、彼ら自身が属する西洋文化そのものの位置づけに対する関心でもあった。帝国主義イデオロギーのもとに育った「十九世紀型神話学」のあるものは「神話的世界」としての「未開社会」を克服されるべき過去の形態として位置づけ、高度に文明化された西洋近代世界を優位におく。また、西洋近代を批判する傾向の強い「二十世紀的神話学」ではインド・北米先住民など、西洋近代とは異なる伝統を持つ地域に理想的モデルを求める傾向がある。近現代神話学理論の特徴をなす論法とは、西洋近代人から見た「他者」と

の遭遇、つまり「西洋近代としての『我』」対「神話的世界としての『汝』」の二分法に依拠している、とも結論できるのだ。

近現代神話学史の展開を思想的・社会的背景と無縁でないものとして浮き彫りにする本書の試みは、いかなる学説もまた時代の産物であることを強く読者に印象づける。各章で扱われた神話学者の紹介も簡潔かつ的確だ。十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、「歴史主義と進化論から精神分析理論と構造主義へ」という研究上のパラダイム転換が生じたという指摘にも、神話学が文化的起源探究にかかわる学問であるという指摘にも、異論はない。特に、近現代神話学の主な担い手が西洋人であるため、近現代神話学理論の特徴をなす論法は「西洋近代人」にとつてのルーツの探究となったという指摘は重要である。

しかし、近現代神話学史を語る際に本書で採用された分析軸・分析対象の設定や、二項対立的構図を強調した結論部分、さらに神話学の社会的文化的な存在意義に関する論考については、いくつかの疑問が残る。

まず、神話学史を語る際に本書で採用された「十九世紀型神話学」「二十世紀型神話学」「パラダイムシフト」の分析概念は、事例から導き出される傾向の分類結果といえるものでもあり、神話学史の見取り図と問題の所在を明らかにする仮

説的な枠組みでしかない。著者はこれらの分析概念が「仮説」であることを明示しておらず、これらのカテゴリーがあたかも歴史上の実体をもつものであるかのように論じているように思われる叙述も章を追うごとに散見される。

本書では、近現代神話学史が「十九世紀型神話学」「二十世紀型神話学」の二項対立の構図のもとに描かれているが、この構図は神話学史を論じる際にはどれほど有効なのだろうか。神話学は本質的に「複数の文化の比較」という問題意識をもっているが、神話研究の際の「比較」とは、二項対立的な構図を前提として行われる場合ばかりではない。そして、神話学史におけるそれぞれの学説が周辺諸科学に与えた豊饒な影響力や、研究者のかかえた切実な問題関心といった問題は、二項対立的な分析軸に収まりきるものではない。本書で提示された仮説的な構図は学説史の鳥瞰図を描く上では有用だが、それらの妥当性は包括的に再検討される必要がある。そして、二項対立に依拠しない視点からの神話学史の叙述も可能であろう。

また、神話学史の展開が神話学の姉妹学問たる宗教学・宗教史学の展開とも明確に比較して論じられていたならば、「十九世紀型神話学」「二十世紀型神話学」の二項対立の構図もより説得的になっただろう。本書では、十九世紀末から二十世紀初頭にかけて生じた「世俗化」「西洋中心主義の動揺」が、

「神話学のパラダイム・シフト」仮説の背景として無前提に指摘されるが、この「世俗化」「西洋中心主義の動揺」こそ、神話学の「パラダイム・シフト」と同時期に神学から独立した学問である「比較宗教 comparative religion」＝宗教学・宗教史学を生んだ背景である、という点は指摘されていない。ここでは、著者は宗教学・宗教史学史の展開を念頭に置いて神話学史を論じた可能性があることを指摘しておきたい。しかし、宗教学・宗教史学史に影響を与えた「パラダイム・シフト」が神話学に影響を与えたそれと同一のものであったかは今後検討が必要になろう。

本書では、神話学のもつ思想性、政治性、そして歴史との関係をめぐる問題が折りに触れて指摘される。この問題提起は真剣に受けとめられるべきである。しかし、この問題は本書では詳論されていない。ここから示唆される点についていくつか論じておきたい。

神話学は文化的起源探究の問題にもかかわらず領域であるがゆえに、歴史性とは決して無縁ではない。歴史主義と進化論に依拠する「十九世紀型神話学」も、「無時間性・無意識」を重視して近代的宗教性を批判する「二十世紀型神話学」も同様である。また、神話学者たちにとって、自らの属する文化の起源としての「古代」や「宗教的伝統」といった事象に対する視角が歴史性の刻印を帯びていることを痛切に意識した

りする事態や、文化的始源たる「古代」や「宗教的伝統」が時として「他者」であったはずの「未開」や「異境」に共通するなにより見知らない姿をとって現れる場面に直面するという事態は、恐らく避けられないものであろう。そして、文化的始源の像が理想化された過去や異境、あるいは文化的伝統として「神話学」の名の下に語られて文化に多大な影響を与えたり、政治的に利用されたりする事例は、決して特異なものではないし、近現代神話学史に限らず、「比較」を方法論とする研究成果が利用される際にはよくみられることでもある。こうした状況を背景として、研究者たちはどのようにして、神話学のかもしだす思想性と政治性と歴史性の密接な関係のかもしだす問題に対応してきたのだろうか。特に、たとえば、本書であげられた研究者たちが直面する「キリスト教以前の世界」と彼らの思考方法に根本的な影響を与えた「支配的宗教としてのキリスト教文化」との相克の場合のように、すでに社会的権威となった宗教と、民俗宗教的伝統、そして研究対象としての神話に対する距離感が学説の形成とその援用に密接に関係している場合には、神話学のもつ歴史性という側面は、二項対立の構図を超えた近現代神話学史を語る試みを示唆する。

神話学が本質的に免れ得ない思想性と政治性のかもしだす問題は、本書で扱われる神話学者の人選にも窺える。「正統的

な」神話学者の紹介が概説の役割ならば、他にも紹介すべき人物は少なくないはずなのに、なぜ他の五名のビッグネームたちと比べると明らかに通俗的なキャンベルが紹介されていて、痛烈な批判の対象になっているのだろうか。

キャンベル理論に対する著者の批判は、単に彼の理論の粗雑さや恣意性にだけではなく、楽天的なまでの信念の表白や、「預言者的に神話を語るために、読者に信じるか信じないかを要請する宗教に近いものと化す」ような思想性の強さやアメリカ文化帝国主義的な政治性の強さにも及ぶ。この批判は神話学が本質的に思想性・政治性を免れ得ない分野であるという根本的な問題につながる。神話学のような領域は一見政治性とは縁が薄そうだが、集団と個人とアイデンティティをめぐる問題を扱うがゆえに、実は、研究者の精神的背景が研究成果に反映されやすく、本質的に思想性・政治性を強く帯びやすい。特定の立場の利害のためではなく、中立的かつ公正になされたはずの研究でも、成果が受け手に「生きる意義」を示唆したり、社会や文化に大きな影響を与えたり、「ほとんど宗教に近いもの」としてみなされることもある。また、神話学の今日的な課題が研究者の切実な問題意識に発する「生の意義」と神話の關係の探究にあるだけに、研究成果の社会的文化的な存在意義に対する研究者自身の姿勢や発言のありかたは神話学研究者にとってアクチュアルな課題となる。キャ

ンベル理論のようないかがわしさを秘めた理論と「預言者」的な研究姿勢に対する著者の痛烈な批判は、こうした背景に由来する。しかし、思想性・政治性と学問の關係のありかたとは、神話学に限らず様々な文化研究にとっての永遠の課題でもある。

学説史を思想的系譜とあわせて論じる本書の手法は、一見浮き世離れた学問分野にもアクチュアルな社会的文化的な存在意義があることを明らかにする。この手法は神話学や宗教学に限らず、比較文化研究にとっても示唆的であり、文化に関する基礎研究の社会的文化的な存在意義のありようの再検討を建設的に進めうるような一つの方向を指し示す。本書のこうした問題提起は高く評価されるべきだが、本書での著者は、神話学の社会的文化的な存在意義については詳論せず、事例をあげるに留めており、この側面の抱える問題の大きさと複雑さとアクチュアリティを読者に明確に提示していない。さらに、あとがきには「神話学は不必要な学問かも知れないが」という述懐も見える。著者のこうした姿勢は、現在の日本で文化に関する基礎研究が置かれた困難な立場を如実に映し出すもののように思われる。本書の手法にはからずも表れている「浮き世離れた学問」の存在意義をアクチュアルに描き出す姿勢がより明確に打ち出されていれば、本書の画期的な性質はさらに確かなものとなり、文化に関する基

礎研究を「浮き世離れしていて不必要である」とみなす立場に再考をせまるものとなりえただろう。ともあれ、こうした手法による学説史の再検討が今後さまざまな分野でなされていくことを期待したい。